優秀賞

祖母から母へつなぐガン保険

埼玉県　開智未来中学校　三学年　藤島　繁杜

僕には生まれた時から、母方の祖母がいない。子どもが大好きで、おばあちゃんになるのが夢だったという祖母は、僕の母が高校生だった時に胃ガンになった。

その頃は今と違って、患者本人にはガンであることを告知しないことが多かったので、病院から祖父に電話がかかってきて、病名を告げられたそうだ。

その時すでにガンはかなり進行していた状態だったけれど、祖父は「胃潰瘍だから手術すれば治る。」と嘘の説明をすると、祖母に「ちゃんとガン保険に入っているから、本当のことを言っても大丈夫だよ。」と言われ、祖父はごまかすことができなくなってしまい、祖母の前で号泣してしまったそうだ。

祖母は高校生だった母にも「うちはガンの家系だから、将来ちゃんとガン保険に入るのよ。」と言っていたらしい。

実際ガン保険に入っていたおかげで、祖母は当時としては高度な治療を受けることができたそうだ。でもスキルスという胃ガンの中でも特に悪性度が高いガンだった為、およそ一年半の闘病生活ののち亡くなってしまった。

だから僕は写真でしか祖母を知らない。もし生きていたら、たった一人の孫である僕が生まれたことをとても喜んだだろうと母が言う。僕も会ってみたかったと思う。

母が祖母に言われたガン保険の大切さを実感したのが、僕が五歳の時だった。「ガンの家系」と言われた通り、母もガンになったのだ。

その時僕は幼稚園の年長になったばかりで、正直なところ当時のことをあまり覚えていない。でも母と話をして、少しずつ色々なことを思い出すことができた。

夏休みに入るとすぐに、母は手術を受けた。主治医の先生が五歳の僕に配慮してくださり、手術の当日に入院するようにしてくれたり、手術後も最短日数で退院させてもらったので、母の不在はそれほど感じなかったようだ。

退院した母は、毎日リハビリや放射線治療の為に通院しなければならず、僕は夏休み中もほとんど毎日幼稚園に預けられた。今までも母が仕事をしていたので夏休み中でも幼稚園に行ってはいたので、あまり不思議に思わなかった。時々、友だちの家族にプールに連れて行ってもらっていたが、いつも母が一緒に行かなかった理由が今ならわかる。

秋になると今度は抗ガン剤治療が始まった。副作用で髪が抜けるからとウィッグを用意し、髪を短く切ってもらった。長い髪の母しか知らなかった

僕は母に向かって、「男の子になっちゃったね。」と言って母や祖父を泣かせたらしい。この頃が一番大変な時期だったそうだ。母は副作用で体が辛いので、僕は幼稚園の延長保育を利用して夜まで預けられた。早めに仕事を切り上げた父が迎えに来るのだが、僕は「もっと早く迎えにきて。」と毎日文句を言って困らせていたようだ。週末には祖父が来て僕の遊び相手をしてくれた。父は平日早く帰らせてもらっていた分、週末は休日出勤をしていた。そうやって家族やまわりのサポートを受け乗り越えたのだ。

ガン治療はお金と時間がかかる。治療費以外にもお金はかかるし、仕事ができなければ収入も減る。もしガン保険や医療保険がなければ、とても大変だっただろう。

母の抗ガン剤治療は卒園直前に終わった。今も定期検査と投薬治療を続けているが、母は元気になった。

卒園前、保護者が九年後の子どもへ手紙を書いたそうだ。母は九年後に自分がいないかもしれないと思いながら手紙を書いた。

六歳の僕と十五歳の僕へ。

もうすぐ僕は十五歳になる。九年前の母からの手紙が届くのだ。中学三年生になった僕にあの時の母はどんな手紙を書いたのだろう。